

元旦メッセージ

2010.1.1(金)
西軽井沢福音センターにて
ベック兄メッセージ(メモ)

おめでとうございます。今年こそ、イエス様が再臨されますように祈るべきではないでしょうか。本当は新年のメッセージとして最初に S 兄弟がメッセージをするべきだったのです。お願いしました。元旦だけに行きます、と。しかし奥様の T 姉妹が病気になって、来られなくなってしまったのです。けれど、クリスマスのためにと、兄弟から次のようなカードをいただきました。彼らの許可なしに読みます。(笑)

「いつも主のためにご自分の身を省みず、働いておられるご兄弟に心から感謝申し上げます。どうか聖霊の宮としてのご兄弟のお身体が守られますように、心からお祈りしています。私たちの愛する集会は、終わりの世にあってサタンの攻撃を受けています。私たちは、ベックご兄弟を先頭に、兄弟姉妹が心を一つにして固く信仰に立ってサタンに打ち勝ち、主の生けるみからだなる教会としての使命を果たし、そろってご再臨を迎えることができますように、霊の満たしとお導きを心から願っております。」

そして一つのみことばが添えられていました。

ヨハネの黙示録 22章12節

「見よ。わたしはすぐに来る。わたしはそれぞれのしわざに応じて報いるために、わたしの報いを携えて来る。」

14節

「自分の着物を洗って、いのちの木の実を食べる権利を与えられ、門を通過して都にはいれるようになる者は、幸いである。」

と。

12月28日の松代の家庭集会在終わる頃に、N兄弟は次のように言ったのです。「あっ、分かった。今年こそ主に信頼しよう」と。これこそ大切なことなのではないでしょうか。「今年こそ、主に信頼しよう！」

ロマ書10章11節を見ると、次のように書き記されています。

聖書はこう言っています。「彼に信頼する者は、失望させられることがない。」

結局、聖書は何と言っているか、このことこそが大切なことなのです。つまり、人間の考えていること、人間の思っていること、人間の感じていることは決して大切ではないのです。「聖書は何と言っているか」、これが大切です。なぜかと言いますと、聖書は「事実」だけを宣べ伝えているからです。別の言葉で言いますと、私たちが聖書を判断するのではなく、聖書が私たちを判断すべきだからです。聖書は、主なる神ご自身が語られたことをそのまま私たちに伝えています。ですから聖書に書かれているのは事実のみです。それを私たち人間が認めようが認めまいが、事実は事実です。

イエス様は多くのことを話されました。今私たちが体験するようになった主イエス様は、ご自分の約束を守ってくださるお方です。みことばを必ず守られるお方です。ですから、百パーセント信頼できるお方です。聖書はこう言っています。『彼に信頼する者は、失望させられることがない。』と。「私たちは決して、決して失望させられることがない」と信じ、確信すれば幸せです。決して失望させられないための条件は、「信頼すること」です。継続的に信頼し続けることです。つまり、意識的にイエス様により頼むことであり、私たちの「全信頼」はイエス様に集中されなければなりません。その条件として、人生の終わりに至るまで意識的な信頼の態度が続けられなければならないのです。

三つの実例について少し考えましょう。

* 第一番目。アブラハム

アブラハムという男は主に信頼した人でした。彼は自分にみことばを与えてくださった主を信じたのです。彼は心から信頼したのです。死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる主を信じたのです。彼は、「主の全知全能」を深く確信したのです。私たち人間にはまったく望みがないように思われる場合であっても、主に信頼するならば不可能が可能となります。「アブラハムは望み得ないときに望みを抱いて信じた」と聖書は語っているのです。彼は意識的に目に見えるものから目をそらし、目に見えないお方に頼ったのです。ですから彼は大いに祝福され、恵まれたのです。

* 第二番目。モーセ

モーセはこの世の欲しいもの全部を手に入れることの出来た男でした。彼の将来は本当に輝かしいものになるはずでした。けれども彼は全部捨てたのです。「モーセは苦しむことを選んだ」と聖書は語っています。ちょっと考えられないことです。なぜなら彼は王子でありましたから、望むすべてのものを自分の手に入れることができたのです。本当に恵まれた状況におかれていました。しかし彼は、全部放棄したのです。ヘブル書の著者は書き

ました。

へブル人への手紙 11章24、25節

信仰によって、モーセは成人したとき、パロの娘の子と呼ばれることを拒み、はかない罪の楽しみを受けるよりは、むしろ神の民とともに苦しむことを選び取りました。

選ぶとき、まず考えなくてははいけません。そして、祈らなければなりません。モーセもまた真剣に考えたのです。そして「苦しむこと」を選んだのです。どうしてでしょうか。彼はキリストのゆえに、(彼はイエス様がお生まれになる千五百年前に生きていた男でしたが、彼はイエス様のことが分かったようです。なぜか、それは私たちには分かりませんが、聖書はそう言っているのです。) 受けるそしりを、エジプトの宝にまさる大きな富と思いました。彼は報いとして与えられるものから目を離さなかったのです。信仰によって、彼は王の怒りを恐れないで、エジプトを立ち去りました。「目に見えない方を見るようにして、忍び通した」からです、とあります。

モーセはこの世の富や教養を、とこしえの報いと比較して、その結果このような決断を行なったのです。彼はこの世のいろいろな楽しみの結果が「死」であること、そしてその「死後」には裁きが下って、「永遠の滅び」に行くことを知っていました。彼の経験は、「主に信頼するなら失望させられることがない」というものでした。彼が信頼してから、イスラエルの民は救われました。ひとりの人の信頼によって、二百万人の人々がパロの奴隷から解放されました。聖書は言っています。『彼に信頼する者は、失望させられることがない。』と。

信仰の父と呼ばれたアブラハムはこの事実を経験したのであり、神の友と呼ばれたモーセも同じ事実を体験しました。もう一つ

* 第三番目。ダニエルの三人の友たち

彼らも、「主に信頼する者は、決して失望させられない」ということを経験しました。あの三人の友たちの特徴は、「幼子のような信頼」また「妥協なき信頼」でした。それゆえに、彼らは火の中に投げ込まれてしまったのです。主はまず助けようとなさいませんでした。聖書は記しています。当時の世界を治めたネブカデネザル王という傲慢な男は、言ったのです。「もしあなたがたが、角笛、二管の笛、立琴、三角琴、ハーブ、風笛、および、もろもろの楽器の音を聞くときに、ひれ伏して、私が造った像を拝むなら、それでよし。しかし、もし拝まないなら、あなたがたはただちに火の燃える炉の中に投げ込まれる。どの神が、私の手からあなたがたを救い出せよう」。三人の友たちはネブカデネザル王に言いました。

ダニエル書 3章16節後半から18節

「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王

よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

と。

この三人の確信は、『主に信頼する者は、失望させられることがない。』というものでした。彼らは主の全知全能により頼み、目に見えないお方を心の目で見たとです。奇跡が起こりました。聖書は続いて記しています。ネブカデネザルは言ったのです。(主を知ろうとしなかった者が、です。)
「ほむべきかな、神は御使いを送って、王の命令にそむき、自分たちのからだを差し出しても、神に信頼し、自分たちの神のほかはどんな神にも仕えず、また拝まないこのしもべたちを救われた。それゆえ、私は命令する。諸民、諸国、諸国語の者のうち、このダニエルの三人の友だちの神を侮る者はだれでも、その手足は切り離され、その家をごみの山とさせる。このように救い出すことのできる神は、ほかにないからだ。』

「主なる神に信頼する者は、失望させられることがない。これこそが、ダニエルの三人の友だちの体験であり、また喜びの告白でした。彼らは近視眼的ではなく、また自分中心でもなく、ただ主のご栄光のためにと、妥協せず、すべてを主に任せたのです。

主のご栄光のため、また失われている多くの人々が救われるため、そして信じる者が新しく造り変えられるため、霊的に成長するために、私たちも同じ態度をとれば、決して、決して失望させられることはありません。

どのような状況に置かれていても、私は主に信頼します、という断固たる態度をとることができれば、主は、新たなる恵みを与えてくださり、日本にあるすべての集会を大いに祝福してくださるに違いありません。

了